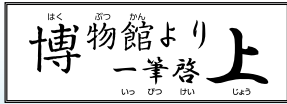


☎487-2332



新型コロナウイルス感染防止のため、博物館も3月より断続的に臨時休館が続き4月17日以降、5月15日まで臨時休館となりました。この期間を利用し、館内全面ワックスがけなど普段なかなかできない業務を行いました。

「標茶町博物館紀要」第1号を発行しました

標茶町博物館の研究報告集「標茶町博物館紀要」第1号を発行しました。前身の「標茶町郷土館報告」を引き継ぎ、本町に関わる自然と歴史の報告や論文、雑記などを掲載しています。

今号の内容は、山川雄大氏による「北海道弟子屈町から確認されたヒガシニホントカゲ」、小荷田行男氏による「北海道東部における後期旧石器時代文化からアイヌ文化の各文化における生業」、当館学芸員坪岡による「標茶町博物館設置への流れ」「平成30年度博物館活動報告」となっています。

図書館に配置しているほか、希望者には無料配布しています（数に限りがあります）。興味のある方は、どうぞご覧ください。



博物館の出来事

～休館中だからこそできる、さまざまな調査～

▶ キタサンショウウオが絶滅危惧種に！

環境省によりまとめられた、絶滅の恐れがある野生生物に関する書籍「レッドデータブック」が今年の3月27日に改訂され、キタサンショウウオが従来の準絶滅危惧種から絶滅危惧1B類となりました。

絶滅危惧1B類には、阿寒湖などで知られるマリモヤ、幻の魚とも呼ばれるイトウなどが含まれており、絶滅への危機的な状況が2段階引き上げられたことになりました。

本町でもキタサンショウウオの生息が確認されています。平成4年には町の天然記念物に指定され、教育委員会にて定期的に調査を行っています。今回のレッドデータブックの見直しを受け、博物館では今年度予定していなかった卵のう確認調査を急ぎ実施することにしました。この調査によりキタサンショウウオの生息数を推定することができます。



キタサンショウウオの奥に写る青白いものが卵のう（卵が集まったもの）。生みたての卵のうは美しく青く輝く。

長い冬が終わりすっかり春らしい季節になりました。博物館の周りでも生き物たちが活発に動き回っています。今回は今の時期、林や森の奥から「コンコンコン…」と木を叩く音を聞かせてくれるキツツキ類について紹介したいと思います。

一般的にキツツキと呼ばれている鳥はキツツキ科の野鳥を示しています。そのため「キツツキ」という名前の鳥は図鑑には載っていません。キツツキ類は、木を「コンコンコン」と叩いたりほじったりして、餌を探したり巣穴を掘ったりすることで有名ですが、餌を探したりする際とは明らかに違う、大きくリズムカルな音で木を叩くことがあります。これは「ドラミング」といわれ、求愛や縄張りを主張する意味があります。

本町ではさまざまなキツツキ科の野鳥を観察することができます。キツツキ科の中では最もよく見られる「アカゲラ」、アカゲラより小さい「コアカゲラ」、アカゲラより大きい「オオアカゲラ」、キツツキ科の中で一番小さい「コゲラ」、黄緑のカラーが良く目立つ「ヤマゲラ」、天然記念物でありキツツキ科の中では最大で真っ黒い体に赤い頭が印象的な「クマゲラ」がいます。これらキツツキ科の多くは「キョッキョッキョ…」と特徴的な声をあげながら飛び立つことが多いので、野外でも比較的に見つけやすい野鳥です。

キツツキ類は体の構造なども独特で、調べるほど奥が深い野鳥です。皆さんも野外で見かけた際に、注目してみてはいかがでしょうか。

町内で見られるキツツキ科の中から一部を詳しく紹介します



アカゲラ

キツツキ類の中では最もよく見られる種類で、住宅街で見かけることもあります。背部分の白い丸模様が大きく見えるのが特徴です。雄は頭が赤いので写真はメスだと判断できます。



特徴的な模様



オオアカゲラ

アカゲラによく似ていますが、アカゲラより若干大きいです。背部分にアカゲラのような大きい白丸はないです。お腹の両脇に縦じまの模様が濃く見えます。雄は頭が赤いので写真は雌といえます。



アカゲラのような背中の模様はない



コゲラ

雄と雌の両方とも茶色みを帯びており、雄の頭頂部には赤色が見えます。北海道で見られるキツツキ科の中では最も小さいです。背中の模様が木の幹とよく似ているので、見つけるのに苦労しますが「ギー」という独特の鳴き声で存在を確認できます。



ヤマゲラ

黄緑のカラーと独特の鳴き方が目立ち、春先によく見られます。オオアカゲラより少し大きいです。北海道にのみ生息しており、本州にはこれとよく似た「アオゲラ」が生息しています。写真のように頭の前の方（人間でいうおでこの部分）が赤いのは雄だけです。

